2015年
11月17日
火曜日

異文化の交渉

田　禾　准教授（人文科学、中国語学）

最近中国からの観光客が多くなり、あちこちで中国語の会話の声が聞こえる。先日ある飲食街で3、4人の中国人の会話が耳に入った。「ほかの店に行こう」、「いや、もうすぐ開店でしょう、待ちましょうよ」。よく見ると、彼らが立っていた店は入り口に「準備中」の看板が出ていた。日本人なら迷わずほかの店に行くが、中国人にとってはむしろこの看板を出すことは「ready-go!」のように、「間もなく営業がはじまる」という客を呼び込む意味として理解される。つまり、ある言葉或いは言語表現の中身に対して日本人と中国人の間で異なる「解読」が生じる。この現象は「異文化交渉」の研究対象の一つにもなる。日本と中国は互いの言語から取り入れた同じ漢字を使用する語彙の中には、意味が同じものもあれば、まったく異なる意味を表す場合も少なくない。よく例としてあげられる「娘」（中国語で「はは」という意味）、「手紙」（中国語のトイレペーパー）など完全に別の意味となる語彙は、むしろ暗記すれば特に混乱しない。問題になるのは「準備中」のようなものだ。例えば、日本で食べる餃子といえば、焼き餃子を指す場合が多いが、中国では餃子を言うと水餃子のことを指す。焼き餃子は中国語では〝鍋貼〟という。このように、もともと中国の食べ物餃子は日本文化に受容され、日本人の生活習慣によりその概念の中身も水餃子から焼き餃子に変化した。このように異なる文化の影響で、概念自身が変わった言葉への理解には誤解が生じやすい。「お茶」という言葉もそうだ。中国では主に「茶葉」のことを指す。モノならまだ理解しやすいが、空間など抽象的な概念の違いはなかなか気づかない。例えば、「18才以上」というのは18才も含むか、集合写真で「私から右へ2番目の人」と言った場合、「私」は含まれるのかどうか、など、人それぞれの理解があるかもしれない。先日内田先生から一つ面白い例を紹介された。中国の税関で手続きする時、行列の先頭の床に、〝請在黄線外等候〟と書かれている。「黄色い線の外側でお待ちください」という意味だ。自分側が「外側」と理解して、みんな税関のカウンターより距離を保って待っている。ところが、日本の電車駅でよく「黄色い線の内側で」という放送を聞くが、もし、中国の税関の例に当てはめれば、自分たちが外側で、電車のほうが内側となってしまう。幸い人間の安全意識により、自動的に電車より遠いほうを「内側」として理解している。空間概念は生活習慣と関わることが多いため、誤解されることも多い。初めて日本人の友人宅を訪ねた中国人が、「あがってください」と言われ、思わず2階のほうまで行ってしまったという。

近年中国語の中に日本語からの外来語もある。例えば「オタク」から〝宅男〟、〝宅女〟という新語が出てきた。辞書にも集録され、解釈は「ずっと家にいてほとんど外出せず、ネットやネトゲ等の室内活動にふけっている男（女）」（第6版の現代漢語詞典）。この言葉もまた誤解が生じやすい。これからグローバル化と共に、違う国から様々な言葉、生活習慣が自分の国に入り、受容されながら変容もする、その変化の過程を観察のも面白いかも。■